

# 第1回偕行社慰霊祭

について

## 慰霊・援護委員会

はじめに

令和4年4月17日、好天に恵まれ、偕行社慰霊祭が靖國神社において斎行されました。

また、これに先立ち市ヶ谷駐屯地メモリアルゾーンにおいて陸軍大将阿南惟幾茶毘の碑、杉山元元帥及び吉本貞一大将自決之跡の碑、陸軍少佐晴氣誠慰霊碑、全陸軍航空奉賛同人会碑、そして防衛省殉職者慰霊碑に対して偕行社理事長、御遺族阿南建太様、市ヶ谷台慰霊会の皆様、陸士・陸幼代表者などが献花、拝礼をいたしました。

## 偕行社としての慰霊の在り方

偕行社が陸軍の元将校から陸自元幹部自衛官に継承されていくことから、慰霊・顕彰及び追悼等の在り方についても今後どのように行われるべきかを検討してまいりました。

本来なら国家がその在り方を確立し、法律に基づき、国家のために尊

い一命を捧げられた陸軍の戦死者の英霊に加え、公務に起因して殉職された自衛隊員の御霊を、国家の恒久的な慰霊及び追悼施設に祀り、慰霊祭及び追悼式を行うべきと考えます。

しかしながら国家としてしかるべき姿で英霊の慰霊・顕彰及び追悼が行われていないことから、陸軍の元将校と同じ国を護る志を持つ陸上自衛隊元幹部自衛官で構成する偕行社として、国家に代わり、国のために殉じられた方々の慰霊・顕彰と国民一人一人の「国を護る志」の大切さを普及するとともに、今後現職陸上自衛官などが事に臨んで任務遂行中に亡くなった場合国家としての慰霊・顕彰が整齐と実施されることに強い思いを致して、偕行社が慰霊祭を斎行することとしました。

## 第1回偕行社慰霊祭の概要

目的は、国家防衛のため尊い一命を捧げた陸軍将兵、海軍将兵、更には戦争において国のために亡くなられた学徒、女子挺身隊員などの英霊を慰霊・顕彰し安らげく神鎮まらんことを祈念するとともに、感謝の念を捧げる、でありました。

来賓として国会議員、防衛事務次

官、統幕各幕代表者、近隣部隊長、関係協力団体、近隣偕行会長などを迎え、「遺族、陸士・陸幼各期代表者、法人賛助会員、各種会員が参加し、総参加者は約200名でした。

供花も頂き、本殿前に26基が並び、陽光に美しく彩りを添えました。

慰霊祭は、さわやかな微風がそよぐ中、開式の辞の後、元海自東京音楽隊員のトランペット奏者による国歌吹奏に続き、修祓、献饌、祝詞奏上、祭文奏上、つづいて同じくトランペットによる献奏で「ふるさと」「同期の桜」「海行かば」が唳々と鳴り響き、慰霊祭が一層印象深いものとなりました。

このあと、本殿へ進み、代表者の玉串奉奠に合わせて参加者全員が拝礼しました。

## 第1回偕行社慰霊祭 祭文

森勉偕行社理事長が読み上げた「祭文」に慰霊祭の考え方、偕行社を陸自元幹部自衛官が受け継いでいく覚悟なども表明されていますので、やや長くなりますが全文を載せます。

\* \* \*

「本日4月17日は、明治維新以降近代国家として発展する我が国が、国軍建軍後初めての国運をかけての対外戦争である日清戦争終結の日であります。爾来、明治・大正・昭和のわが国防衛のために尊い一命を捧げられた多くの陸軍将兵とともに海軍将兵の戦没者の御霊が祀られるこころ靖國神社において「第1回偕行社慰霊祭」を執り行うにあたり、ご参加の皆様を代表して、謹んで祭文を奏上いたします。

今からさかのぼること概ね170年、ペリー来航という軍事力を背景とした開国・開港の要求、2回の下関での敗北、薩英戦争の経験から、近代的な国づくりと欧米列強の軍事力に対抗し得る近代的な国軍の必要性を痛感した時の明治政府は、明治2年兵部省を設置し、軍事制度と組織の整備に着手しました。明治5年



けられ、明治6年徴兵令に基づく徴兵が開始され、我が国の国軍としての基礎が整えられました。この日本国軍の建軍からまもない明治7年には陸軍士官学校、明治8年には陸軍幼年学校がそれぞれ創設され、その翌年の明治9年には海軍兵学校が改称され海軍兵学校が開校しました。

陸軍士官学校からは、約3万9千名の卒業生が陸軍の将校として巣立っていきました。陸軍将校の方々、明治10年の東京九段を皮切りに全国各地に設立された『偕行社』において、親和・研鑽に努められ、明治・大正・昭和にわたる我が国の近代国家建設の過程において、日本陸軍の中核として国家存亡にかかわる我が国の枢要な軍事の任にあたられ、我が国の脊柱としての役割を果たされました。

特に、明治以降の日清戦争から大東亜戦争までの数次に亘る戦争に際しては、多くの陸軍将校の方々は、『国を護る志』のもと、伝統ある祖国の将来にわたる国体の護持と繁栄、そして安寧を希い、北は酷寒不毛の地、南は酷暑瘴癘の地に赴き、陸に空において、勇戦敢闘して祖国に殉じていかれました。その数は約

8千余柱に及びます。愛する家族を故国に残して異国の地で敢然と散つて逝かれた陸軍将校の方々と一家の柱を失い後に残されたご遺族の方々、今深い悲しみに思いを致すとき、今なお万感胸に迫るものがあります。

同じく、海軍兵学校を卒業された約1万1千名の海軍将校の方々、太平洋などの海・空戦において奮戦敢闘して、約4千名の方々がわが国防衛のためひたすら「国安かれ」の一念のもと、祖国のために殉じられました。また学徒や女子挺身隊など多くの方々が勤労働員中に軍需工場で亡くなられました。このような多くのかけがえのない方々を失ったことは、ご遺族はもとより、国家にとつて誠に大きな痛手であり、悲痛の念に堪えません。

今日、わが国民が享受している民主主義国家としての平和と繁栄は、明治以降の国家存亡の危機に際して、『国を護る志』をもつてわが国の存立を担う崇高な職務に殉ぜられた多くの方々の国のために尽くすという無私の献身により築かれた礎の上にあると言つても過言ではありません。改めて、ここ靖國神社に祀られる陸軍将校を始めとする全ての

御霊に謹んで哀悼の意を表しますとともに、限らない尊崇と感謝の誠を捧げます。

現在、遠く欧州においては、核保有国が通常軍事力を行使して隣国の体制の変換を求める軍事侵攻事態が生起しておりますが、世界はこれを抑止できない状況です。翻つて、わが国周辺には核保有国が存在しています。わが国を取り巻く安全保障環境は極めて厳しい状況にあると認識せざるを得ません。

このような中、同じ「国を護る」という強い意志を持つ陸上自衛隊などの元幹部自衛官に継承されていく偕行社は、先人から託された歴史と伝統・文化に恵まれたこの素晴らしい祖国日本を護るため、今後は戦前の陸軍将校の皆様のご意思を受け継いで、陸上自衛隊の退官者の組織として、わが国の陸上防衛にかかる安全保障の充実発展に尽力するとともに、陸上自衛隊を支援してまいります。

一方において、先の大戦が終結してから長い歳月が流れ、今や戦後生まれの世代が国民の主力を占めるようになり、平和と繁栄に慣れるうちに、戦没者に対する敬意と慰霊の心

が薄れつつあることが憂慮されます。更に、国のために尽くす責任感の希薄化と国民道義の退廃は大きな懸念であります。偕行社は、本日のこの慰霊祭をおして、国のために殉じられた方々の慰霊・顕彰と国民一人一人の「国を護る志」の大切さをしっかりと普及し、後世に受け継いでいかなければならないと決意を新たにしますものであります。

先般の令和の御代の幕開けに伴い御讓位あそばされた上皇陛下は、御即位以来30年、戦没者の慰霊には格別の大御心を寄せられ、国内外にわたり慰霊の旅を続けてこられました。偕行社は、この上皇陛下の戦没者の慰霊に対する強い思召しにそうよう、尊い一命をわが国のために捧げられた方々の御霊の慰霊・顕彰が、世界の近代国家と同じように、国家として、齎行されるよう提言して参ります。併せて、陸上自衛隊などの元幹部自衛官に継承される偕行社として、今後同じ「国を護る志」を持つ現職陸上自衛官などが事に臨んで任務遂行中に亡くなった場合、国家としての慰霊・顕彰が整育と実施されるよう同じく提言していく所存であります。

わが国の防衛のために尊い一命を捧げられた陸軍将兵、海軍将兵、更には戦争において国のために亡くなられた学徒、女子挺身隊員などの英霊を慰霊・顕彰し安らげく神鎮まりますことを祈念するとともに、感謝の念を捧げ、この記念すべき日の慰霊の言葉といたします。

令和四年四月十七日

公益財団法人偕行社

理事長 森 勉

おわりに

偕行社慰霊祭は滞りなく斎行されました。参列されたある従前会員の方から、「厳粛で荘厳な慰霊祭で大変良かった。理事長による祭文は、英霊に対する偕行社会員の気持ちを余すところなく表してくれ、凜とした気持ちになった。特に最後に自衛官が任務遂行中に亡くなった場合などのことを述べたところは感激した。安心して偕行社を元自衛官の人たちに任せられると確信した」との声が寄せられました。

第1回偕行社慰霊祭の斎行に際し、靖國神社、ご支援いただいた偕行社のスタッフの皆様はこの場を借りて感謝の意を表します。

偕行社は、今後毎年4月17日に靖國神社で慰霊祭を斎行します。多くの皆様の参列をお待ちしております。